様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2016
課題番号：２３５２０６４８

研究課題名（和文）年少者日本語教育の協働的実践研究－教科学習を通して身に付く「ことばの力」の検証－

研究課題名（英文）Collaborative practical research of Japanese Language Teaching for Children

研究代表者
池上　摩希子（IKEGAMI, Makiko）

早稲田大学・国際学術院（日本語教育研究科）・教授

研究者番号：８０４０９７２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語を第一言語としない児童生徒に求められる、日本語で学ぶ力とは何かを明らかにするものである。JSLカリキュラムの課題を踏まえて日本語教育実践への関与を行い、参与観察やインタビューといった調査も並行して実施した。また、得られた成果をHPや研究会で報告することによって、各地で児童生徒の日本語教育に携わる実践現場や教育行政との連携を図った。実践の記述と発信を行うことで実践者との連携が促進され、協働的実践研究として位置づけることができた。

研究成果の概要（英文）：This study clarifies anything with the ability to learn in Japanese found by the children who does not assume Japanese a first language.We participated in practice based on the problem of the JSL curriculum , and investigated concurrently such as participation observation and an interview. By reporting the obtained result in HP or a research council., cooperation with the practice spot and educational administration which are engaged in a children's Japanese-language education in various places was aimed at.Since we performed description and dispatch of practice, cooperation with us and a practitioner was promoted , and it was possible to place our study as cooperative practice research as a result.

研究分野：日本語教育

キーワード：年少者日本語教育　JSLカリキュラム　協働実践研究　ネットワーク　教科学習　支援システム

１．研究開始当初の背景

(1) 日本語を第一言語としない児童生徒への対応は、かれらが通う学校だけではなく地域や社会全体において喫緊の課題となっている。日本語教育の領域においても、研究や実践が進められてはいるが、学校現場や地域の支援教室において、児童生徒が抱える日本語と教科学習の面での課題に関して、教師や支援者が苦慮している現状が続いている。

(2) この状況に鑑み、研究グループでは JSL カリキュラムを軸にした実践研究を行い、学校現場や教育行政との連携を図っていった(基盤(C)2008～2010 年､課題番号 20520481)。その結果、JSL カリキュラムをめぐる課題がより顕在化し再認識された。それは、日本語指導者と教員間の連携や支援システムの整備不足など、環境や制度に関する課題であったり、「学ぶ力」をどのように育むかといったカリキュラムの理念と実際をつなぐ課題でもあった。これらの課題を精査し、年少者日本語教育学の側面から「ことばの力」を重視して課題解決を行うことを目指す必要があると考えた。

２．研究の目的

(1) 本研究は「日本語を第一言語としない児童生徒に求められる『日本語で学ぶ力』とは何かを、立場の異なる実践者との協働的実践を通して明らかにする」ことを目標としている。

(2) 上記の目標を達成するために、①実践(「教科指導を通してことばの力を身に付ける」実践)を記述し、その意味付けを行うこと、② ①を元に、教科学習と日本語学習を統合する支援システムを構築し、その展開をはかること、この 2 点を目的として研究を行った。

３．研究の方法

本研究においては、1)調査 2)実践 3)成果報告 の３つの局面を構成し、段階を踏みつつ、また必要に応じて同時並行でも調査研究を行った。1)は研究グループが継続して関係を作ってきた教育現場との関係を発展させさらに深めることで参与観察やインタビューとして実施した。2)はJSL カリキュラムを援用した実践を支援し、記録を分析することで、3)は HP や各種ジャーナルでの発表と学会を含む研究集会等で発表や報告を行うことで、議論と共有を進めた。

４．研究成果

(1)静岡県浜松市における調査と浜松市立Ａ小学校における実践を継続して実施できた。浜松市における児童生徒に対する日本語指導としては、多様な支援者グループによる多様な支援が実施されている現状がある。しかし、各支援が有機的な結びつきをもって機能しているわけではないことも指摘されていた。この点を明らかにし、支援システムとしてのあり方を検討するために、日本語担当教員、管理職、ボランティア、教育行政担当者などにインタビューを行った。また、「算数科の学習を通して育成できることばの力」を重視して実践を行うグループの活動へ、関与と協力を行っている（現在も継続中)。これらの調査と実践を進める中で、複数の学校の日本語担当教員の協力を得て、指導実践の記録の収集と蓄積を行うことができた。実践記録を中心にインタビューを補足データとし、全体を書籍の形にまとめて 2015 年度に刊行した（(6)でも言及)。

(2)三重県鈴鹿市において、中学校での JSL カリキュラムの実践に協力を行った。特に、2011 年度には教育委員会との連携のもと、JSL カリキュラム普及のための研修や中学校の校内研修に参加し、協力を続けた。

(3) 2012 年度後期と 2013 年度前期は研究代表者が特別研究期間を得てバンコクに滞在

し、研究課題である JSL カリキュラムの考え方をベースにした、「体験型」「関係性重視」の日本語教育に関する調査研究を進めた。具体的には、「親と子の継承語教室」の参与観察、バンコクに居住する日本人家族の児童生徒が学ぶ教育機関（幼稚園、インターナショナルスクール、ボランティア教室）の見学を行った。また、同市内の児童生徒に対する日本語支援者の研究会、研修会へ講師として参加し講演も行った。こうした活動を通じて関係が構築された保護者や支援者に聞き取り調査を行うこともできた。バンコクには約 4 万人の邦人と家族が在住し、児童生徒に対する日本語教育も展開されている。そこに現れる課題を把握し考察することを通して、本研究の課題にも有効な効果が得られた。バンコクでの児童生徒に対する日本語教育は、日本帰国が前提になっていない子どもたちの場合は特に、日本語が第二言語なのか継承語なのかといった問題を越えて、思考と自己表現を支えることばの力が求められている。この点において、JSL カリキュラムの考え方をベースにしたことばの力と重ねての課題探求を行った。

その他の連携の例としては、実践者との協働のひとつの形として、実践者が実践を記述する支援を行った。バンコクにおいて研究課題に関連する日本語教育実践を対象に調査を行った関係で、実践報告（「タイにおけるホームステイプログラムの実践と改善　－プログラムに関わるすべての人のエンパワーメントを目指して－」『言語教育実践　イマ×ココ』第 2 号、ココ出版 2014）をまとめる支援ができた。直接執筆したわけではないが、実践者との連携と実践の記述方法の蓄積、といった研究課題に沿った成果であると考えている。

(4)2013 年度末には、複数の言語環境にある子どもたちのことばの力の発達を調査している 3 つの科学研究費プロジェクトの報告会を開催した。多様な言語文化背景をもつ子どもたちのリテラシーの発達について、大きな枠組みで考え、協議できたことは成果といえる。
http://www.gsjal.jp/ikegami/pastinfo.html#program

(5)2014 年度には、ここまでの研究をまとめる位置づけで研究メンバー全員による学会発表（パネルセッション）を行った。セッションでは、子どもが複数言語のひとつとして日本語を学ぶという観点から、「特別の教育課程」化を検討した。そして、この施策が学校教育現場と年少者日本語教育にどのような課題を示しているのかを提示し、ことばの学びの視点から、今後の日本語教育が学校や行政とどのような社会的連携を図る必要があるか、包括的な議論と問題提起を行った。大きな課題に対して、これまで研究チームが関わってきた各地（例えば、鈴鹿市や浜松市）での実践、学校現場（鈴鹿市、浜松市、都内の小中学校、神奈川県の高校）での実践とそこで得られた知見をベースに、提案と課題の提示ができた。学会発表というかたちでまとめた以降も、各地の実践者との連携を続け、各地で教育行政の会議への出席、研修会、講演会への参加も続けている。

(6)継続して執筆編集していた浜松市の教育実践に関する書籍を 2015 年度に刊行できた。浜松市は本研究期間中、研究代表者と分担者が、JSL カリキュラムに基づく授業支援を通して関わりを持ち続けた地域であり、そこで形成できたネットワークをまとめ、発信することができた（５．主な発表論文等、〔図書〕①）のは本研究の大きな成果といえる。

(7)2016 年 3 月に、「子どもの日本語教育研究会」を発足できた。
http://kodomononihongo.web.fc2.com/
この研究会は、多様な言語文化背景をもつ子

どもたちを対象とする日本語教育・学校教育・地域支援の実践と研究の相互交流を図り、その現場の成長と関連領域の研究の発展を促進することを目指している。研究期間内に得られた知見や把握した課題をもとに、現場の実践者とともに考え、行動していこうという試みである。具体的には、1）日本語教育実践の蓄積、2）年少者日本語教育の内容・方法の研究、3）実践のためのリソースの開発、4）上記成果の公開と発信　を目標に据えてある。研究グループから複数名が発起人として研究会のキックオフに参加し、発足に貢献できた。2017 年現在、研究グループとしては代表、副代表、事務局を担当することで研究会活動を継続、発展させている。

(8) 本研究は平成 27 年度を最終年度に予定していたものであったが、研究代表者の入院加療を理由に、平成 28 年度まで研究期間を延長することをお認めいただき、(7)で述べた研究会の活動を発展させることができた。これによって、これまでの連携先（地域、支援者）との関係を保つことができ、引き続き、実践研究として進めることが可能となった。研究会活動としては、8 月にワークショップ（於；横浜）、12 月に研究会（京都）、3 月に大会（東京）を実施した。特に、大会においては、研究会企画としてパネルセッション「複数言語環境下にある子どもの日本語教育と特別支援教育の接点と課題」を行った。また、公募パネルにおいて「日本語で学ぶ力を育む JSL カリキュラムの取り組み」としてこれまで連携を続けてきた小学校の実践を発表していただけた。実践者との連携と実践の記述、発信といった研究課題に沿った成果であると考えている。

(9)今後の展望としては、(7)で述べた研究会の運営と並行して、情報発信（HP の運営、Web ジャーナルの発行）とリソース開発を行う。研究会の活動内容は HP で公開し共通の研究課題をもつ方々と広く共有している。Web ジャーナルも 2018 年度内に発行する準備を進めている。研究目的であった、実践を記述しその意味付けを行うことを通して、今後は新たなリソースを開発するところにまで進めていく。また、教科学習と日本語学習を統合する支援システムを構築し展開をはかるという目的は、限られた地域ではあっても事例として示すことができた。今後は（1）で言及した、教科学習を通してことばの力の育成を目指す実践を継続して支援していく。同時に支援システムの事例を増やしていく計画である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 6 件）

①池上摩希子（2017）「国際化の中で学力を捉える」『児童心理』pp.75 - 79，査読無
2017 年 2 月号，NO. 1035，金子書房

②池上摩希子（2015）「第二言語としての日本語の発達と支援―ニューカマーの子どもたちの「ことばの学び」を支援する」『発達』36(141)（特集：ことばとコミュニケーションの発達），70-74．査読無

③池上摩希子（2014）「言語教育で育てたいもの―日本語教育の立場から」『指導と評価』60(8)（特集：言語活動をどう指導するか），16-18．査読無

④池上摩希子（2014）「外国人児童生徒の教育と「内なる国際化」」『都市問題』105(5)（特集：日本のなかの外国人），87-95．
査読無

⑤深澤伸子，池上摩希子（2013）「実践はだれが何のために共有するのか―バンコクの親と子どもが日本語と向き合う教室で考える」『言語教育実践イマ×ココ』1，61．査読無

〔学会発表〕（計３件）

①川上郁雄，野山広，石井恵理子，池上摩希子，齋藤ひろみ（2014 年 5 月 31 日）「『特別の教育課程』化は子どもたちのことばの教育に何をもたらすのか―年少者日本語教育のこれまでの成果と教育実践から考える」2014 年度日本語教育学会春季大会パネルセッション（東京：創価大学）

②川上郁雄，池上摩希子，宮崎里司，河上加苗（2012 年 8 月 19 日）「教育委員会と大学の連携による教育支援システムは日本語教員養成に何を示唆したか―「目黒モデル」における日本語指導員による教育実践を通して―」2012 年日本語教育国際研究大会口頭発表（名古屋：名古屋大学）

③川上郁雄，池上摩希子，宮崎里司（2012 年 5 月 27 日）．「JSL バンドスケールを用いた日本語能力把握によって教育支援システムはどのように展開したかー鈴鹿市における JSL 児童生徒に対する教育実践を通してー」2012 年度日本語教育学会春季大会口頭発表（東京：拓殖大学）．

〔図書〕（計１件）

①齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子編（2015）『外国人児童生徒の学びを創る授業実践ー「ことばと教科の力」を育む浜松の取り組みー』くろしお出版、252 頁

〔産業財産権〕　該当なし

〔その他〕
ホームページ等
http://kodomononihongo.web.fc2.com/

６．研究組織

(1)研究代表者

池上　摩希子（IKEGAMI　MAKIKO ）

早稲田大学・大学院日本語教育研究科・教授

研究者番号：80409721

(2)研究分担者

川上　郁雄（ KAWAKAMI　IKUO ）

早稲田大学・大学院日本語教育研究科・教授

研究者番号：30250864

(3)研究分担者

齋藤　ひろみ（ SAITO　HIROMI ）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：50334462

(4)研究分担者

石井　恵理子（ ISHII　ERIKO　）

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：90212810

(5)研究分担者

野山　広（ NOYAMA HIROSHI　）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究・情報センター・准教授

研究者番号：40392542